

Oracle® Fail Safe

リリース・ノート

リリース 3.3.3 for Windows

部品番号 : B13843-01

原典情報 : B12073-01 Oracle Fail Safe Release Notes, Release 3.3.3 for Windows

2004 年 4 月

このドキュメントでは、このリリースの新機能、ソフトウェアの修正済エラー、ソフトウェア互換性、ハードウェア互換性、インストールと削除の注意点や、リソースの可用性を高める構成の注意点などを説明します。

1 このドキュメントの構成

このリリース・ノートは次の項目で構成されています。

- [新機能および変更された機能](#)
- [修正されたソフトウェア・エラー](#)
- [ソフトウェアの互換性](#)
- [ハードウェアの互換性](#)
- [インストールと削除](#)
- [Oracle Services for MSCS](#)
- [Oracle Fail Safe Manager](#)
- [Oracle データベース](#)
- [Oracle HTTP Server](#)
- [ディスク・リソース](#)
- [仮想アドレス](#)
- [Oracle Enterprise Manager との統合](#)
- [このリリースで更新されるドキュメント](#)
- [追加情報](#)
- [ドキュメントのエラーおよび脱落](#)

ORACLE®

Copyright © 2004, Oracle. All rights reserved.

Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。Oracle® Fail Safe は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

2 新機能および変更された機能

次の項で、このリリースの Oracle Fail Safe の新機能と変更された機能について説明します。

2.1 Oracle Database リリース 1 (10.1.0.1) のサポート

このリリースでは、Oracle Database リリース 1 (10.1.0.1) がサポートされるようになりました。ただし、Management Agent はサポートされません。また、次の Oracle リソースは引き続きサポートされます。

- Oracle データベース
- Oracle Intelligent Agent (リリース 9.2 以下)

また、可用性を高めるために以前のリリースの Oracle Fail Safe を利用して構成した Oracle HTTP Server を管理するために、Oracle Fail Safe Manager を引き続き使用できます。

サポートされている各リソースのバージョンの詳細は、「[ソフトウェアの互換性](#)」を参照してください。

2.2 fssvr の新しいコマンド修飾子 /GETSECURITY

このリリースでは、fssvr の新しいコマンド修飾子として /GETSECURITY が使用されます。/GETSECURITY 修飾子を使用すると、コマンドが実行されるシステムのセキュリティ情報が表示されます。オラクル社では、FS-1075 n エラー (n は 0 ~ 7 の値) を診断するときに、fssvr コマンドにこの修飾子を指定して (各クラスタ・ノードで) 実行することをお勧めします。

コマンドおよび対応する出力は次のようになります。

```
fssvr /getsecurity
```

```
Looking up user account information for OracleMSCSServices.  
The user account must be a domain user account with local Administrator  
privileges. The user account must also have the 'Log on as batch job'  
privilege.
```

```
    User account specified for OracleMSCSServices is NEDCDOMAIN\cluadmin  
    User account specified has local Administrator privileges  
    User account has the 'Log on as batch job' privilege
```

```
Looking up user account information for Cluster Service. The user account  
must be a domain user account with local Administrator privileges. The user  
account must also have the 'Log on as batch job' privilege.
```

```
    User account specified for Cluster Service is NEDCDOMAIN\cluadmin  
    User account specified has local Administrator privileges  
    User account has the 'Log on as batch job' privilege
```

```
Checking to see if DCOM is enabled. DCOM must be enabled.  
DCOM is enabled.
```

3 修正されたソフトウェア・エラー

この項では、Oracle Fail Safe のこのリリースで修正されているソフトウェア・エラーについて説明します。

3.1 isAlive 問合せが停止するとフェイルオーバーが発生

以前は、isAlive 問合せが停止しても、Oracle Fail Safe によるデータベースのフェイルオーバーが行われませんでした。この問題は修正されました。

3.2 FSCMD が異常終了しない

以前は、状況によって FSCMD コマンドライン・インタフェースが異常終了することがありました。この問題は修正されました。

3.3 データベース・ポーリング情報の不正確な表示の修正

以前のリリースでは日本語環境でのみ、プロパティ・シートに表示されるデータベース・リソースに関するデータベース・ポーリング情報が正しくありませんでした。この問題は修正されました。

4 ソフトウェアの互換性

この項では、Oracle Fail Safe を Microsoft Windows NT、Microsoft Windows XP、Microsoft Windows 2000 または Microsoft Windows Server 2003 にインストールした場合に互換性のあるソフトウェアについて説明します。

4.1 Microsoft Windows にインストールした場合の Oracle Fail Safe の互換性

このリリースの Oracle Fail Safe は、Oracle Services for MSCS を Microsoft Windows NT Enterprise Edition バージョン 4.0 (Service Pack 6a)、あるいは Microsoft Windows 2000 Advanced Server または Datacenter Server にインストールし、Oracle Fail Safe Manager を次のいずれかのオペレーティング・システムにインストールした場合に、次の表に示すソフトウェアと互換性があります。

- Microsoft Windows NT バージョン 4.0 (Service Pack 6a)
- Microsoft Windows 2000
- Microsoft Windows XP
- Microsoft Windows Server 2003

ソフトウェア	リリースまたはバージョン
Microsoft Cluster Server (MSCS)	バージョン 1 以上
Oracle Database (Standard Edition および Enterprise Edition)	Oracle8 リリース 8.0.6
	Oracle8i リリース 8.1.7
	Oracle9i リリース 1 (9.0.1)
	Oracle9i リリース 2 (9.2.0.1)
	Oracle9i リリース 2 (9.2.0.2)
Oracle10g リリース 1 (10.1.0.1)	

ソフトウェア	リリースまたはバージョン
Oracle Intelligent Agent	リリース 8.1.7
	リリース 9.0.1
	リリース 9.2.0.1
	リリース 9.2.0.2
Oracle Enterprise Manager	リリース 2.1
	リリース 2.2
	リリース 9.0.1
	リリース 9.2.0
Oracle HTTP Server	Oracle Database の次のリリースに付属:
	■ リリース 1 (9.0.1)
	■ リリース 2 (9.2.0.1)
	■ リリース 2 (9.2.0.2)
	Oracle9iAS の次のリリースに付属:
	■ 1.0.2.2.1
■ 1.0.2.2.2	

注意: Oracle Fail Safe では Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control Agent はサポートされません。

4.2 Oracle Fail Safe Manager の下位互換性

Oracle Fail Safe Manager リリース 3.3.3 を使用すると、Oracle Services for MSCS リリース 3.3.3、3.3.2、3.3.1 および 3.2.1 に接続できます。Oracle Fail Safe Manager リリース 3.3.3 は、リリース 3.2.1 よりも前のリリースのサーバーには接続できません。

Oracle Fail Safe Manager リリース 3.3.3 を使用して、Oracle Fail Safe でサポートされなくなったリソース (Oracle Forms および Reports など) を構成することはできません。サポートされなくなったリソースに対応する Oracle Fail Safe Manager のダイアログ・ボックスやプロパティ・シートでヘルプにアクセスしようとする、ヘルプは使用できず、エラー・ウィンドウが開いて「トピックが存在しません。更新されたヘルプ・ファイルについては、アプリケーション・ベンダーに問い合わせてください。(129)」というメッセージが表示されます。ただし、このメッセージは適切ではありません。更新されたヘルプ・ファイルはありません。

1 つのシステムに複数の Oracle Fail Safe Manager をインストールできます。たとえば、Oracle Fail Safe Manager リリース 3.3.3 をインストールして、リリース 3.2.1 のサーバーに接続し、後でデータベース、一般サービス、Oracle HTTP Server を可用性を高めるように構成できます。さらに、Oracle Fail Safe Manager リリース 3.3.2 を別の Oracle ホームにインストールし、リリース 3.3.2、3.3.1 または 3.2.1 のサーバーを使用して可用性を高めるように Oracle Forms Server を構成し、Oracle Fail Safe Manager リリース 3.1 を別の Oracle ホームにインストールしてリリース 3.1 のサーバーを管理できます。

5 ハードウェアの互換性

ハードウェア・ベンダーに連絡を取り、Oracle Fail Safe を使用するハードウェアで、Microsoft Cluster Server ソフトウェアの使用が保証されていることを確認してください。

6 インストールと削除

この項では、Oracle Fail Safe のインストールについて説明します。

インストールと削除の詳細は、『Oracle Fail Safe インストレーション・ガイド』を参照してください。

6.1 Oracle Fail Safe リリース 2.1.3 から Oracle Fail Safe リリース 3.3.2 にアップグレードした後の 2 回の再起動

新規のインストールが完了すると、インストーラからシステムを再起動するように求められます。この再起動によって、システム・パスが Oracle Fail Safe リリース 3.3.2 ディレクトリを含むように更新されます。

Oracle Fail Safe リリース 2.1.3 からアップグレードする場合は、最初の再起動の後に Oracle Fail Safe Manager で「クラスタの検証」を実行して Oracle Fail Safe データベース・リソース DLL を更新します。次に、各クラスタ・ノードをもう一度再起動し、クラスタ・サービスが新しいリソース DLL を取り出せるようにします。

6.2 Oracle Services for MSCS のインストール時の Microsoft Windows イベント ビューアの稼働禁止

Microsoft Windows イベント ビューアを稼働中に Oracle Services for MSCS をインストールすると、インストール・プロシージャから、fsus.dll（日本語システムでは fsja.dll）ファイルをコピーできないというエラーが返され、再試行するか、無視するか、あるいは取り消すかをたずねられます。Microsoft Windows イベント ビューアを停止し、Oracle Fail Safe のインストール・エラー・ウィンドウで「再試行」をクリックすると、インストールを続行できます。

6.3 MSCS クラスタ アドミニストレータによるフェイルセーフ・リソース・タイプの問題の表示

Oracle Fail Safe のインストールの完了後、MSCS クラスタ アドミニストレータでフェイルセーフ・リソース・タイプ（データベースなど）の問題が表示される場合があります。MSCS クラスタ アドミニストレータでは、そのリソース・タイプ名の上にオー斯拉ッシュ（φ）記号を表示して、問題が発生したことを示します。

この問題が発生した場合は、次のようにします。

1. Oracle Fail Safe のインストール後にクラスタ・ノードを再起動していなかった場合は、再起動します。
2. PATH 環境変数に、Oracle Services for MSCS パスが含まれていることを確認します。（コマンド・プロンプト・ウィンドウで、PATH と入力してください。Oracle Services for MSCS パス（%ORACLE_HOME%\fs\%fs%bin）が含まれているはずで、含まれていない場合は、これを追加し、Oracle Services for MSCS パスがないノードを再起動します。）
3. Oracle Fail Safe リソース DLL の FsResOdb.dll が、%ORACLE_HOME%\fs\%fs%bin にインストールされていることを確認します。

リソース DLL がない場合は、Oracle Fail Safe を再インストールします。

4. Oracle Fail Safe Manager を使用してクラスタを検証（「トラブルシューティング」メニューで「クラスタの検証」を選択）して、その後、各クラスタ・ノードを1つずつ再起動します。「クラスタの検証」コマンドは自動的に Oracle リソース DLL の登録を検証します。すべてのクラスタ・ノードを再起動する必要がない場合もあります。1つのノードを再起動した後、MSCS クラスタ アドミニストレータでリソース・タイプ名からオースラッシュ記号が削除されているか確認します。オースラッシュ記号がなくなっている場合は、すべてのクラスタ・ノードを再起動する必要はありません。

7 Oracle Services for MSCS

この項では、Oracle Services for MSCS について説明します。

7.1 Microsoft Windows 2000 における DCOM セキュリティ変更

DCOM のデフォルト設定のアクセス権限リストが空の場合、SYSTEM および INTERACTIVE アカウントは暗黙的アクセス権を持ちます。Microsoft Windows 2000 では、ユーザーまたはグループがリストに追加されると、暗黙的権限が適用されることとはなくなり、明示的に指定されたユーザーまたはグループのみに権限が付与されます。Microsoft Windows NT では、SYSTEM および INTERACTIVE アカウントは暗黙的権限を保持します。

Oracle Services for MSCS のインストールの際に、Oracle Fail Safe のユーザー・アカウントがデフォルトのアクセス権限リストに追加されます。アクセス・リストが空の場合、SYSTEM アカウントは自動的に追加されますが、INTERACTIVE アカウントは追加されません。

Oracle Services for MSCS をインストールした後、HTML ファイルのハイパーリンクを開くときや、Microsoft Outlook または Outlook Express を使用するときには問題がある場合は、dcomcnfg.exe ツールを使用して必要なユーザーをデフォルトのアクセス権限リストに追加します。

詳細は、Microsoft サポートの Web サイトを参照してください。

7.2 異なるアカウントのもとで実行可能な Oracle Services for MSCS と Microsoft Cluster Server

クラスタが最初に構成され、Microsoft Cluster Server が最初にインストールされた場合、これは Microsoft Windows ユーザー・アカウントのもとにインストールされています。

Oracle Services for MSCS は、（システム・アカウントではなく）全クラスタ・ノードに管理者権限を持つドメイン・ユーザー・アカウントのもとで Microsoft Windows サービスとして実行されます。Oracle Services for MSCS をインストールする際、必要な権限を持つユーザー・アカウントのユーザー名およびパスワードの組合せを入力するように求められます。このアカウントは、Microsoft Cluster Server がインストールされたアカウントと同じである必要はありません。

Oracle Fail Safe リソースの Is Alive ポーリングは、Oracle Services for MSCS が稼働しているアカウントではなく、Microsoft Cluster Server が稼働している Microsoft Windows アカウントを使用して実行されます。

8 Oracle Fail Safe Manager

この項では、Oracle Fail Safe Manager について説明します。

8.1 Microsoft Windows 2000、Microsoft Windows XP または Microsoft Windows Server 2003 で稼働する場合、Oracle Fail Safe Manager ではユーザー名およびパスワードが必要

Microsoft Windows 2000、Microsoft Windows XP または Microsoft Windows Server 2003 システムで稼働している Oracle Fail Safe Manager にログインする場合は、ユーザー名およびパスワードを入力する必要があります。

他のオペレーティング・システムで稼働している Oracle Fail Safe Manager にログインする場合は、ユーザー・アカウントに適切な権限があれば、ユーザー名およびパスワードを入力する必要はありません。

9 Oracle データベース

この項では、Oracle データベースについて説明します。

9.1 「スタンドアロン・データベースの検証」コマンド実行時のエラー

Microsoft Windows では時として（別プログラムがファイルを更新している場合など）、データベース用の初期化パラメータ・ファイルが別ユーザーによってロックされていると判断され、ファイルが一時的に名前を変更されたり、読み込み / 書き込みアクセスのために開かれたりすることが拒否されます。このために、「スタンドアロン・データベースの検証」コマンドが実行されたときに問題が発生し、不可解なエラー・メッセージが返される原因ともなります。「スタンドアロン・データベースの検証」の実行時に次のメッセージと同様のエラー・メッセージが返された場合は、オペレーティング・システムのエラー・メッセージが表示されずに、データベース用の初期化パラメータ・ファイルの名前を一時的に変更できるかどうかを確認してください。

FS-10890:Oracle Services for MSCS はスタンドアロンの検証操作中に失敗しました。

FS-10818:Oracle Database リソース・プロバイダで、リソース TESTDB1.US.ORACLE.COM の構成処理の準備中に失敗しました。

FS-10160: スタンドアロンの Oracle データベース TESTDB1.US.ORACLE.COM の検証に失敗しました。

FS-10611: ファイル d:\oracle\database\initestdb1.ora を読み込むために開こうとして失敗しました。

0xB: プログラムを不適切な形式でロードしようとして失敗しました

別のアプリケーションがファイルを制御し始めた場合は、ファイルが常駐するディスクを所有するクラスタ・ノードを再起動することで、問題を解決できます（再起動後に必ず、データベース・ファイルを含むすべてのクラスタ・ディスクを、データベースのホストとなるノードに移動しなおしてください）。

9.2 データベースのシャットダウン時に停止して再起動されるデフォルトの Oracle Intelligent Agent

デフォルトの Oracle Intelligent Agent は、デフォルトの Oracle Intelligent Agent が稼働中のノードでフェイルセーフ・データベースを検出してデータベースへの接続を保持しますが、これは適切ではありません。（デフォルトの Oracle Intelligent Agent はノードのホスト・アドレスでリスニングし、仮想アドレスを使用するためフェイルセーフ・データベースを検出するべきではありません。）このため、フェイルセーフ・データベースが Oracle Fail Safe Manager を使用して normal または transactional モードでオフラインに

設定されると、Oracle Fail Safe はデータベースをシャットダウンする前にデフォルトの Oracle Intelligent Agent をシャットダウンします。Oracle Fail Safe は、データベースのシャットダウン操作が完了した後、デフォルトの Oracle Intelligent Agent を再起動しません。

9.3 サンプル・データベースの作成

Oracle Fail Safe には「サンプル・データベースの作成」コマンドが用意されており、事前構成済のサンプル・データベースをユーザーの指定したクラスタ・ディスクにインストールします。サンプル・データベースは、テストおよび Oracle Fail Safe オンライン・チュートリアルでの使用を目的とするもので機能もかぎられています。本番には使用しないでください。

次の表に、Oracle Fail Safe リリース 3.3.3 に含まれるサンプル・データベースのリリースと、サンプル・データベースでテストできる Oracle Database のリリースを示します。

サンプル・データベースのリリース	使用するデータベースのリリース
8.0.5	リリース 8.0.6
8.1.5	リリース 8.1.7
9.0.1	リリース 1 (9.0.1)
9.2.0	リリース 2 (9.2.0)
10.1.0	リリース 1 (10.1.0)

サンプル・データベース・ファイルは、適切なリリースの Oracle Database がインストールされているノードにのみインストールできます。たとえば、Oracle Database リリース 8.1.7 がインストールされている場合は、Oracle Fail Safe のインストール時に 8.1.5 用のサンプル・データベース・ファイルのみがインストールされます。

サンプル・データベース作成時の対象リリース以外のリリースでのサンプル・データベースの使用には、既知の制限事項があります。Oracle Database リリース 8.1.7 で使用するように 8.1.5 のサンプル・データベースがインストールされている場合、データベースに接続したときに次のエラーが返されます。

エラー :

ORA-06533: PLS-908: 格納された形式 SYS.STANDARD は、このリリースでサポートされません。

パッケージ DBMS_APPLICATION_INFO へのアクセス・エラーです。

エラー :

ORA-06533: PLS-908: 格納された形式 SYS.STANDARD は、このリリースでサポートされません。

Oracle Fail Safe で提供されているサンプル・データベース機能は、テストにのみ使用します。本番用のデータベースを作成するには、Oracle Database Configuration Assistant を使用するか、データベースを手動で作成します。

9.4 SYS にする必要があるデータベース・ユーザー名

Oracle Fail Safe リリース 3.2.1、3.3.1、3.3.2 および 3.3.3 のすべての操作を成功させるには、オペレーティング・システム認証が使用される場合を除き、データベース・ユーザー名が SYS であることが必要です。オペレーティング・システム認証が使用される場合、Oracle Fail Safe は SYS アカウントを使用しません。

10 Oracle HTTP Server

この項では、Oracle HTTP Server について説明します。

10.1 「Oracle HTTP Server をグループに追加」操作の失敗

デフォルトの httpd.conf ファイルによる問題のため、Oracle Database リリース 8.1.7 で「Oracle HTTP Server をグループに追加」操作が失敗した場合、クラスタワイド操作の際に次のエラーが返されます。

FS-10382: NTCLU-221 : リソース <Oracle-HTTP-Server-name> をオンラインにしています。

** エラー : FS-10726: リソース <Oracle-HTTP-Server-name> は失敗状態にあります。

** エラー : FS-10012: クラスタ・リソース <Oracle-HTTP-Server-name> をオンラインにできませんでした。Windows イベント ログでメッセージを確認してください。

** エラー : FS-10782: Oracle HTTP Server リソース・プロバイダで、リソース <Oracle-HTTP-Server-name> をオンラインにしようとして失敗しました。

** エラー : FS-10497: 操作のクラスタワイド・ロールバックを開始します。

この問題を修正するには、%ORACLE_HOME%/apache/apache/conf/httpd.conf にあるデフォルトの httpd.conf ファイルを開いて、Apache JServ 1.1 の構成とカスタム設定用の Oracle 構成ファイルを含むコマンドの先頭にコメント文字 (#) を挿入します。コメント文字を挿入した後、httpd.conf ファイルには次の行と同じような行が含まれます。

```
# Include the configuration for Apache JServ 1.1
```

```
# include "C:\Oracle\Ora81\Apache\JServ\conf\jserv.conf"
```

```
# Include the Oracle configuration file for custom settings
```

```
# include "C:\Oracle\Ora81\Apache\Apache\conf\oracle_apache.conf"
```

11 ディスク・リソース

Oracle Fail Safe では、EMC GeoSpan ディスクを使用できます。ただし、リソースのグループへの追加時にリソースで使用されている EMC GeoSpan ディスクがそのグループにまだない場合、Oracle Fail Safe では FS-10203 エラーが返され、処理がロールバックされます。

このエラーが発生した場合は、リソースに必要な EMC GeoSpan ディスクがすでに含まれているグループに、リソースを追加します。

12 仮想アドレス

MSCS ネットワーク名に後続スペースが含まれている場合に、Oracle Fail Safe Manager で仮想アドレスをグループに追加しようとすると、操作は失敗し、次のエラーが返されません。

NT-5045: クラスタ ネットワークが見つかりません。

MSCS クラスタ アドミニストレータを使用して、後続スペースを削除するようにネットワーク名を変更すると、この問題を回避できます。

13 Oracle Enterprise Manager との統合

この項では、Oracle Fail Safe と Oracle Enterprise Manager の統合について説明します。

13.1 JobOut サブディレクトリの部分的サポート

Oracle Intelligent Agent リリース 8.1.7 は、ジョブ出力ファイルを JobOut というディレクトリに置きます。可用性の高い Intelligent Agent の場合、JobOut ディレクトリは、クラスタ・ディスク上のエージェントの ConfigPath ディレクトリ下にあるサブディレクトリです。Intelligent Agent には、ジョブを実行するための JobOut サブディレクトリが必要です。

Oracle Intelligent Agent を作成し、グループに追加すると、Oracle Fail Safe はクラスタ・ディスク上に JobOut サブディレクトリを作成します。ただし、可用性の高い Intelligent Agent が属するグループを検証するときに、Oracle Fail Safe は、JobOut サブディレクトリが存在するかどうかを検証しません。また、可用性の高い Intelligent Agent のクラスタ・ディスクを変更したときに、Oracle Fail Safe は、新規ディスクに JobOut サブディレクトリを作成せず、旧ディスク上の JobOut サブディレクトリも削除しません。

13.2 物理ノード上でスタンドアロン・データベースとして検出されるフェイルセーフ・データベース

物理ノード上でスタンドアロン・データベースを表示すると、物理ノード上でオンラインになっているフェイルセーフ・データベースが検出されることがあります。この問題は、Microsoft Windows NT バージョン 4.0 Service Pack 5 または 6a で稼働しているシステムで発生します。

グループに Intelligent Agent リソースがある場合、そのグループ内のデータベースは、物理ノードで検出されません。このケースの例外は、データベースが複数の仮想アドレスを使用している場合です。データベースの listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイルで使用されている最初の仮想アドレスが、エージェントで使用するよう選択されていない場合、グループ内のデータベースは物理ノードで検出されます。

13.3 Oracle Fail Safe によって再起動されない物理ノードのデフォルト Intelligent Agent

Oracle Fail Safe リリース 3.1 より前のリリースでは、物理ノードのデフォルト Intelligent Agent は、グループへのデータベースの追加、グループからのデータベースの削除などの各操作時に再起動されました。Oracle Fail Safe 3.1 から、物理ノードのデフォルト Intelligent Agent は自動的に再起動しなくなりました。物理ノードにあるデータベースの更新済リストが必要な場合は、デフォルト・エージェントを手動で再起動します。

14 このリリースで更新されるドキュメント

このリリースでは次のドキュメントが更新されています。

- Oracle Fail Safe 概要および管理ガイド
- Oracle Fail Safe インストレーション・ガイド
- Oracle Fail Safe エラー・メッセージ
- Oracle Fail Safe チュートリアル
- Oracle Fail Safe ヘルプ

キットに付属のドキュメントは、HTML および PDF オンライン形式で提供されます。PDF ファイルを表示するには、Adobe Acrobat Reader 4.0 以上が必要です。最新バージョンは、次の Adobe Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.adobe.com/prodindex/acrobat/readstep.html>

15 追加情報

Oracle Fail Safe の詳細は、次の Web サイトを参照してください。

- オラクル社の Oracle Fail Safe 関連 Web サイト
<http://otn.oracle.co.jp/tech/windows/failsafe/index.html>
- OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の Oracle Fail Safe 関連 Web サイト
<http://otn.oracle.co.jp/document/products/ofs/index.html>
更新されたソフトウェア互換性情報やホワイト・ペーパーなどは OTN-J の Web サイトに掲載されます。
- オラクル社カスタマ・サポート・センター
お問い合わせ先 : <http://www.oracle.co.jp/contact/>
- Oracle University
お問い合わせ先 : <http://www.oracle.co.jp/contact/>

16 ドキュメントのエラーおよび脱落

この項では、リリース 3.3.3 の Oracle Fail Safe ドキュメント・セットで脱落していた内容を説明します。

16.1 『Oracle Fail Safe エラー・メッセージ』での FS-10254 の脱落

『Oracle Fail Safe エラー・メッセージ』には次のエラー・メッセージが記載されていません。

FS-10254 システムに古いリスナーがあるため、Oracle Database 10g TNS リスナーを構成できません。

原因: Oracle Database の以前のリリースの TNS リスナーがシステムに存在するため、Oracle Database 10g TNS リスナーを構成できませんでした。

処置: 次の手順を実行して、既存の TNS リスナーを Oracle Database 10g TNS リスナーにアップグレードします。

1. 既存の TNS リスナーを停止します。
2. 既存の listener.ora ファイルにあるデフォルト・リスナーのエントリを、Oracle 10g ホームの listener.ora ファイルに移動します。

16.2 Microsoft Cluster Server (MSCS) の呼称

Microsoft Windows 2000 の登場以前、Microsoft 社は Microsoft Cluster Service を Microsoft Cluster Server と呼んでいました。Oracle Fail Safe は Microsoft Cluster Service および Microsoft Cluster Server の両方で動作するため、Oracle Fail Safe のドキュメントで両製品は Microsoft Cluster Server と呼ばれています。

16.3 Oracle Data Guard での可用性の高いデータベースの使用

Oracle Fail Safe によって単一インスタンスの Oracle データベースの可用性が高くなり、Oracle Data Guard によって障害耐久力がもたらされます。たとえば、Oracle Fail Safe を使用すると、システムの高可用性を継続して維持できますが、システムの設定サイトに被害をおよぼす障害を防ぐことはできません。同様に、Oracle Data Guard は障害時に優れた回復機能を提供しますが、プライマリ・サイトから物理的に離れたサイトに運用を切り替えるためにかかる時間は、数分の場合もあれば数時間におよぶこともあります。Oracle Fail Safe と Oracle Data Guard を組み合わせることで、データベースの可用性と障害耐久力が高くなります。

